

『古記録文化論』の刊行によせて——三橋正さんの思い出——

大 隅 和 雄

はじめて三橋正さんに会ったのは、一九八四年の秋のことだった。東大文学部の宗教学研究室の林淳さんと会う約束をして、池袋の喫茶店に行ったところ、三橋さんも来ていて、日本仏教史の研究をめぐる話に加わった。三橋さんは、大正大学で菊地勇次郎先生の指導を受け、その年の四月に大学院に入ったということで、法然上人の研究で菊地先生の助言を受けていた林さんと親しくなったということだった。

その時、林さんとどんな話をしたのか、細かなことは思い出せないが、鎌倉仏教研究をめぐって、宗派史とは別の視点が必要だという話をして、終わりに、その年の夏に私が発起人の一人になって、高野山で第一回のセミナーを開いた、「研究会・日本の女性と仏教」について、賛同を求める説明をした。

三橋さんが「女性と仏教」の研究会に現れたのは、一九八七年の一月で、その年の夏に埼玉県東松山で開いた第四回のセミナーでは、問題の立て方をめぐって意見を述べ、若い参加者を代表する論客になった。研究会で編集したシリーズ『女性と仏教』の合評会を企画したのは三橋さんだったが、一九八九年、岐阜の第九回セミナーが終わったあと、数人でもう一泊して議論を続けようということになり、問題の究明が不徹底に終わったという三橋さんの強烈な批判に反論が続出したが、いくら反対されてもつぎつぎに抗弁し、へこまないのに驚き、感心した時の

ことが忘れられない。

女性と仏教の会が第十回で解散したあと、三橋さんと親しくなった私は、仙台で開かれる日本思想史学会の大会と一緒に出かけようになった。三橋さんはよく気が付き、行動の軽快な人で、私はいろいろお世話になった。今年の大会に行くかと聞かれて、行くと答えると、仙台までの特急乗車券を持ってきた、ホテルの予約もとりましたという。思想史学会だけでなく、三橋さんの世話で続いていた院政期仏教研究会でも、小田急の特急券を渡されるのに始まり、三橋さんに云われるままに動いていると、仏教史の新しい知見を得ることができるといふ具合だった。何時だったか、上野駅で三橋さんを待っていたら、大きな花束の包みを持って現れ、仙台に着いたら菊地先生のお墓にお参りしようと思っていますが、一緒にお参りしましょうと云われた。仙台駅でタクシーに乗って、菊地先生のお墓のあるお寺に行き、花を捧げてご冥福を祈った。私は、文学部の学生時代に日本仏教史研究会に出て以来、法然と浄土宗のことについて話を聞き、醍醐寺古文書調査でお世話になっていたので、菊地先生には三橋さんよりずっと前から教えを受けていたが、三橋さんのお陰でお墓にお参りすることができたのを大変有り難く思った。

三橋さんは、女性と仏教の会、日本思想史学会では若手の論客として活動し、これらと思う研究課題については自分で同志を募り、研究会を作った。幅広い関心を持つ三橋さんが始めた研究会は、いくつもあったと思うが、私も参加していた院政期仏教研究会は、速水脩さんを中心にした十人ほどの会で、東海大学の施設などで合宿をした。院政期は、日本仏教史の上で最大の転換期であるという見通しの下で、議論が続けられたが、毎回、研究会の場所と日時、論題の設定などは、すべて三橋さんの企画で進められ、会のあとの見学などまで気配りは行きとどいていた。去年の三月、久しぶりの研究会が明星大学で開かれた折り、はじめて三橋さんの職場を訪ねて、これからの

研究計画を話し合ったが、それが最後の院政期仏教研究会になるとは思いもしなかった。

三橋さんの研究は、平安時代の思想・文化を中心に、広い分野に及んでいるが、中心となっていたのは『平安時代の信仰と宗教儀礼』『日本古代神祇制度の形成と展開』を中心とする神祇史と、平安時代の古記録の研究だった。

平安時代史の研究は、古記録の精読に始まると考えた大学院生時代の三橋さんは、黒板伸夫先生を中心にして慶応大学で開かれていた、小右記講読会に参加して研鑽を積み、会の中心となって、二十年に亘る会の成果を、『小右記註釈 長元四年』上巻・下巻（八木書店）として、二〇〇八年に刊行した。

平安時代の文化と云えば、和歌や物語ばかりが持てはやされるが、往事の社会を支え、動かしていたのは、漢字で書かれた法律や記録、行政や所領経営の文書だったのはいうまでもない。三橋さんは、古記録を精読して、漢字で日記を書いた人々の、精神構造を探り、生活と文化を考え、日本文化史の中で重要な位置を占める、貴族文化の特質を明らかにしようとした。長い時間をかけてその基礎を固めたところで、つぎの段階に進む道が絶たれてしまったことが残念でならない。学界にとって計り知れない損失だと嘆息するばかりである。

この論文集に序文を寄せて頂きたかった黒板伸夫先生は、今年五月に帰天された。さらに、速水脩さんも八月に逝去されたため、代役を私がとめることになった。

二〇一五年九月一〇日

（東京女子大学名誉教授）